

### 3. 新収史料の紹介



#### 【稚児玩犬図(ちごがんけんず)】

※本屏風の大きさは縦102cm×横372.6cm

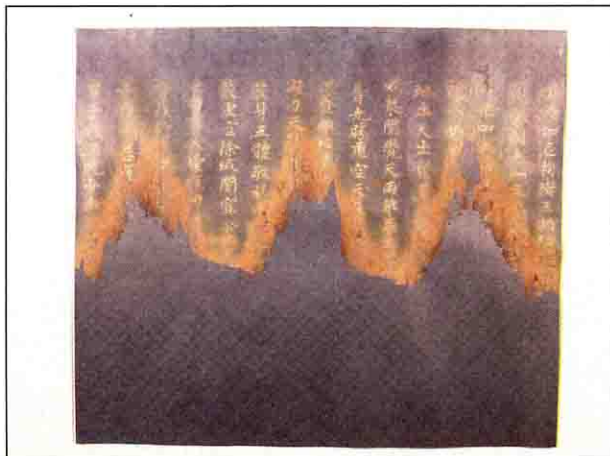
画面の左には橋の上に佇む「稚児」と御付の「童」の姿が描かれる。ここから、稚児の「瀬田橋」からの入水を語る『秋夜長物語絵巻』(あきのよながものがたりえまき)が自ずと想起される。世界が崩壊に瀕した時、メシアとしての稚児の犠牲死により世界は救済されるとする世界観である。流れ流れる稚児の溺死体は一つの美学と化していた。稚児物のもう一つの雄編である『足引き絵』は、かかる陰惨な『秋夜長』的稚児神話を否定するテキストであり、稚児の夭折は語らないが、それでも稚児の背後に「宇治橋」を点描することを忘れない。こうみてくると、この橋上の二人、なにかここには冷たい戦慄がはしっている様に感じられてならない。

一方、右の絵はそれとは別物であろう。「中童子」「大童子」たちが犬と戯れる絵だが、これは何を意味するのか。左の絵とは違い、いささか退廃的にして弛緩の気味がある。が、これもまた、彼ら「童」たちがおりなす世界には違いなからう。

(神田龍身)

※本屏風は2005年度に購入した史料で、2006年秋開催の史料館常設展覧会に出品する予定です

#### 【二月堂焼経(にがつどうやけぎょう)】



紺紙銀字華嚴経断筒

### 4. 史料修復の報告

左の写真は修復後の「紺紙銀字華嚴経断筒(こんしぎんじけごんきょうだんかん)」です。本紙の大きさは縦23.2cm、横31.0cmです。修復では裏打ちを剥がし、欠損部分に類似の紺紙を補い、新たな裏打ちを行いました。

「紺紙銀字華嚴経断筒」は、寛文7年(1667)2月13日の奈良東大寺の御水取(おみずとり)の際の失火により、一部が焼損していることから「二月堂焼経」とも呼ばれています。この1巻は、第二次世界大戦前の旧制学習院時代の歴史地理標本室に收藏されていたもので、現在、当館で保存しています。